
彼女のために僕ができること

is

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女のために僕ができること

【Nコード】

N9061Y

【作者名】

is

【あらすじ】

藤木利央は平凡な人生を目指す人間だった。

ある日彼は平凡な人生を捨てることを決意した。

それは彼にとってほんのちょっとした冒険のはずだったのに…。

気付くとなぜか異世界にいて、ほんの少しのつもりだった冒険は本当の冒険になった。

平凡を望んでいた高校生が異世界で平凡でない人生を送る話です
(予定)

思いつきで書いていきますし、生まれて初めて書く作品です。
それでもよければ是非お付き合い下さい。では。

彼にとって世の中は

世の中で生きていくということは、細い道の上を歩くようなものだ。と彼は考えていた。道の両側は底の見えない崖。

学校に通い勉強をし、社会に出て働く。結婚をして子供を得、育て、老後を迎え死に至る。彼にとって細い道の上を歩くということはそういうことを指していた。いわゆる誰もが描く平凡な人生。

道を踏み外すことは崖から落ちる、つまり彼の人生においての転落を意味していた。いじめに遭う、犯罪を犯す。満足な収入を得られない、幸せな家庭を築けない。およそ彼にとって平凡に感じられない出来事は全て崖から落ちることと同義だった。

いかにして道を踏み外さないか、彼にとってはそれが生きていく上で最も大切なことだった。

しかし一方で、それを窮屈に感じる時もあった。

決まりきった人生を過ごすことに何の意味があるのか、そんな風に思ったりもした。だがその度にこの国で生きていくということ、法律・学校・会社など社会を形作る全てのものは道を踏み外さないためにあるのだと考えた。

平凡な人生を送る道が国によって用意されているのに、わざわざ道から逸れる、それは愚者の行為だと自分に言い聞かせた。

そんな彼の前に今、はつきりと道が現れていた。彼が頭の中で考えていた細い道、両側には底の見えない崖。それがまさに空想ではなく、現実として彼の目の前に存在していた。

彼にとって世の中は（後書き）

はじめてしまった。

いつまでどこまで続くかわかりませんが、
なまあたにかいめでみまもってください

その日は……

藤木利央にとってその日は散々な一日だった。

朝、目を覚ますと嫌な予感が瞬時によぎった。

時計に目をやる。時刻はすでに一限目の授業が始まる時間だった。慌てて飛び起き、学校に行く準備を整え、朝食をとるためリビングに向かった。せめてお茶漬けか、シリアルだけでも摂ってから学校に向かおうと思ったのだ。

そこで彼は会いたくない人物に出会ってしまった。彼の描く平凡な人生を邪魔する存在。

母親。

「あら、お早う。いえ、おそ（遅）ようかしら。こんな時間に起きてくるなんて良い身分ね。誰の稼いだお金で学校に通えているのか、是非教えて欲しいわ。」

全く笑えないギャグと嫌味を言われた。その息はとても酒臭かった。

「わかってるよ、母さん。あなたの労働は無駄にしない。しっかりと勉強してくるよ。」

関わりたくない一心でそう言い捨て、玄関へ向かった。

「大体、あなたが高校へ行くのも私は反対だったのよ。もう働ける歳なんだからさっさと就職して私の面倒を見て欲しかったのに。大体あなたは……。」

母親の愚痴にも似た説教を背に玄関を出た。

これが藤木利央の母親だった。

彼がまだ幼かったころ夫と別れ、女手一つで彼を育ててきた。そう言いつと聞こえは良い。しかし、実際は、夫に逃げられ仕方なく利央を育てたのだ。だが、育ててもらったという実感は彼にはない。

ただ近くにいる人。それが正直な彼の思いだった。

学校に通わせてくれたことには感謝していた。しかしそれも近所の目が会ったからだ。いわゆる世間体のため。食事も与えられず、幼い頃の利央は空腹で何度か死にそうな目に遭っていた。それでも死なずに済んでいるのは近所の人たちの助けがあったからだ。

毎日振るわれる暴力。あなたがいなければというお決まりの言葉。そんな人間を誰が母親だと感じるのか。いや母親を感じる感じないということ自体がおかしな話だった。母親とはそうとを感じるものではなく自然とそうなるものだからだ。

藤木利央にとっては実の母親よりも、自分を助け、面倒をみてくれた近所の人たちこそ、親と呼ぶべき存在だった。

すでに授業は始まっていたが、教室の後ろの扉から中に入った。「すいません。遅れました。」謝罪の言葉を述べ、利央は席に座る。黒板に向かっていていた教師が彼に少し目をやったが、特に何を言うわけでもなく授業を進めた。

「どうしたの。利央が遅刻なんて珍しいじゃない。」

彼の席の前に座る女の子、葛城ゆずはが小声で話しかけてきた。

「うん。寝坊してね。ちよつと疲れてるのかもしれない。」

当たり障りの無い言葉を返す。

「ふーん。まあ良いわ。そんなことより今日のお昼付き合ってくれない？」

「新作？」

自分から話しかけてきたくせにそんなことよりとはどういうことだと思いつながらも尋ねた。

「そんなところ。楽しみにしててね。」

少し顔を赤らめて笑顔でそう言い彼女はまた授業に戻る。

（新作か。楽しみだな。）

少しにやけた表情を浮かべた。

ゆずはは葛城家の人間は利央の面倒をみるのが当然だともいうようにこうして時折、試食と称して彼に弁当を与えた。彼女は弁当だけでなく、他にもあれやこれやと利央の世話をやいていた。

葛城ゆずはは彼がまだ幼少のころ一番面倒を見てくれた近所の人娘だ。利央とゆずはの関係はいわゆる幼馴染と言える。ゆずはの両親は利央に夕食を与え、風呂に入れ、時には家に泊めた。彼にとつて感謝してもしきれない存在だ。

ゆずははそうして面倒をみてくれる葛城家に頻繁に通う内に仲良くなった。

彼の思い描く人生に彼のパートナーとしてゆずはが隣にいるのは彼だけの秘密だ。自分の思いをゆずはに打ち明けてもいない。自分の境遇のことを思うと彼女に思いを打ち明けることはとても大それたことのように感じられたのだ。

利央としては彼女が自分にしてくれる行為の中に、一欠けらだけでも自分への好意があればよいのにと願わずにはいられなかった。

放課後、教師に頼まれた用事をすませ教室に戻る廊下を一人歩いていた。すでにほとんどの生徒が帰宅するか、部活にでており、誰も廊下を歩いていない。グラウンドからは部活に励む生徒の声がかすかに聞こえた。

利央が教室の扉の前に立つ。

すると中から女子生徒たちの声が聞こえた。

「……っから本当はどう思ってるのよ。」

「そうそう。わざわざお弁当を作るなんて好きじゃないとできないよ。もうすでに付き合ってるんじゃないの。」

そんな会話が漏れ聞こえた。誰かをからかうような声だった。

これは教室に入るに入れないなと苦笑しながら、さてどうするかと利央は考える。そんな時だ。

「利央とはそんな関係じゃないの。」

ゆずはの声が聞こえた。利央は思わず聞き耳を立ててしまう。

「利央は小さい頃から一緒だから、私の彼氏とかそんなんじゃない。でもね、私は利央のことを好きとか正直よくわからないし。そして、私は利央のこと……」

「そうよね。彼って家が貧乏だって話だし。皆に対する態度もそっけないもんね。当たり障りのない会話しかないし、全然面白くないもの。そんな人を好きになつたりしないよね。」

ゆずはの言葉に割り込んで別の女子生徒が利央の評価を述べた。そして、複数の笑い声が聞こえる。

利央は心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

女子生徒の評価は気にしていなかった。彼女の評価は利央が意識してそうしてきたからだ。これも彼の平凡な人生を送るための計画。当たり障りの無い会話をするのは、人と深く関わりたくないという思いの現れだった。かと言って孤立してしまつては意味がない。孤立はいじめの標的にされやすいからだ。だから、彼は適度に周りの人間と接するようにしてきたのだ。

ただ、ゆずはの言葉に衝撃を受けた。

<利央とはそんな関係じゃない>

<利央のことを好きとか正直わからない>

世界が足元から音を立てて崩れていくような気がした。

彼女の言葉は密かに彼女に好意を抱いていた利央の心を打ち砕くには十分だった。

利央は教室の扉を開け放つ。

彼を見て驚きの表情になる女子生徒達。

ゆずはの顔は見れなかった。

まるで時が止まったかのように、瞬間瞬間の場面が利央の目に映る。

彼は自分の席から鞆をとると逃げるようにして教室から出て行った。

「利央待つて！」

ゆずはの声が聞こえた気がした。

そして道を踏み外す

（ゆずはのこと好きだったんだな。）

彼は改めて思った。

臆気ながらに考えていたゆずはとの未来像。他愛ない想像でしかないと考えていた。

だからこそ彼はこんなにも動揺している自分に衝撃を受けていた。（本気だったんだ。）自分の思いを確認する。思っていた以上にゆずはのことが好きだった自分に気付く。

（でも、もう遅い。終わったんだ。この思いは。）

急に何もかも嫌になった。

家に帰ると母親がいる。今までの自分の境遇。平凡に生きようと努力していた自分。愚かにもゆずはに思いを寄せていた自分。

本当に何もかもが嫌になった。

そんな彼の前に道は現れた。

細い道。両側には底の見えない崖。利央にとっての平凡な人生の象徴が想像ではなく確かに目の前に存在していた。

（なんだこれは。こんなにはつきりと想像したのは初めてだ。）

あまりにも唐突な出来事に利央はそれを現実のものとは認識できなかった。いつもの想像だと考えた。

だからこそ思った。

道を踏み外そうと。

もう平凡な人生を歩くことは意味がないことに思えた。時折感じた窮屈さを強烈に感じた。今さら生き方を変えられるとは思わなかったが、せめて想像の中だけでも。今まで想像の中でも決して踏み

外さなかつた道を踏み外そうと思った。

利央は決意し前に進んだ。細い道の上に立つ。そしてゆっくりと崖に向けて足を踏み出した。それは今までの現実との決別。少なくとも利央はそう決意するための儀式としての行為と考えていた。

（別に死ぬ訳じゃない。これは想像なんだから。）

「利央。何しているの！」

まさに一步を踏み出そうとした利央に驚きの声がかけられた。

「ゆずは！」

彼女は一体何を驚いているのだろうと思いつながら彼は一步を踏み出し、崖底へ落ちて行く。

「利央！」

利央の目に身を乗り出し叫ぶゆずはの姿が映る。

そして、利央を追って飛び降りてきたゆずはの姿が目映った。

（何だこれ。彼女のことを振り切るつもりだったのに。全く未練がましいな僕は。）

そんなことを考えたのを最後に利央の意識は途絶えた。

そして道を踏み外す（後書き）

とりあえずここまででひとくぎり
おつかれさまでした

彼女との出会い

さらさらと水が流れる音で利央は目を覚ました。朦朧とした意識の中でいつの間に眠ってしまっただろうと考える。

徐々に覚醒する意識の中で、目を覚ます前の自分について思い出した。

（そうだ。眠っている訳ないじゃないか。家にも帰っていない。帰宅途中で想像の世界に身を躍らせていただけじゃないか。）

しかし、妙に晴れ晴れとした気分だった。自分の殻を打ち破った気持ちだった。さあ今から新しい人生のスタートだ。そう自分に言い聞かせ、大きく息を吸い込みぐつと背を伸ばした。

ふと、周りの景色がおかしなことに気付く。

見上げた空は夕方であるはずなのに、青々とし、まるで正午のような明るさ。太陽の位置も高い。周りを見渡せば、近くに小川が流れ、その先には森が広がっていた。

「どこだ。ここは。」思わず呟く。

こんな景色に心当たりはなかった。少なくとも通学路にはこんな景色はなかった。

先ほどまでの晴れ晴れとした気持ちは消え去り、徐々に不安が心を占めていく。自分は今どこにいるのか、気を失っていると思われる時間に一体なにがあったのか。意識が途切れていた時間に恐怖を感じた。自分はまだ想像の世界にいるのか、そんな気さえした。

「誰だ。お前は。こんなところで何をしている！」

突然利央を問い質す声が聞こえた。

声のした方、森へ目を向けると、一人の女性が立っていた。彼女は弓を構えて利央を睨みつけていた。

「誰だと聞いている！お前は言葉が分からないのか？」

重ねて聞かれ、利央は慌てて答えた。

「利央。僕は藤木利央だ！」

「フジキリオウ？変った名だな。では、聞く。お前はここで何をしていた？」

それは自分が聞きたいと利央は思った。

「僕がここで何をしていたかは僕も知りたい。気が付いたらここにいたんだ。よければここがどこだか教えてもらいたい。」

「ふざけるな。そんな訳の分からない話があるか！もしやお主、気がふれておるのか？」

馬鹿なことを言わないで欲しいと彼女に近づこうとすると、足元の地面に矢が刺さる。そういえば彼女は弓を構えていたと思い出す。「悪いが動かないでもらおう。」

そう言いながら新たな矢をつがえ、彼女は利央に近づいてきた。「そのまま動くな。」力がこもった声で素晴らしい、彼女は弓をゆっくりと下ろす。

助かったのか、そう思った利央に対して、彼女は腰に下げていた縄で利央の手首を後手に縛った。

利央は何をするんだと思ったが、全く状況が分からない現状では流れに身を任せるしかないと考えた。

「このままお前を本陣に連れて行く。詳しい話はそこで聞こう。フジキリオウ。」

こうして利央は連れ去られた。

彼の選択 彼女の思惑

赤色の髪が腰まで伸びており、首の辺りで一括りしてある。瞳の色は同じく赤。肌の色は血管が浮き出そうなほど白く、身長は低い。銀の甲冑を身に着けているのでよく分らないが、体つきは華奢に見えた。

（同じ年ぐらいかな。）

それが利央を連れ去った彼女の印象だった。

今、彼は彼女に連れてこられた天幕の中にいた。

利央は後手に縛られたまま円卓に座らされ、目の前には彼女が座っていた。彼女の左側にはフードを被った人物があり、右側には彼女と同じく銀の甲冑に身を包んだ中年男性が座っていた。

「…では、こいつはあの賊どもの仲間ではないというのだな。」

「ええ、姫様。彼は…、フジキリオウと申しましたかな。フジキリオウは賊とは一切関係ありますまい。私が見ますに、彼は生まれたての赤子じゃ。この世のことも一切知らぬ。不思議なことじゃが、あの姿のまま、この世に生を受けたとしか思えぬ。」フードを被った人物がそう告げた。その声は老婆のようにしわがれていた。

「これだから盲いた占い師のいうことはあてにならぬ。どう見ても青年にしか見えぬ男を生まれたての赤子とは。馬鹿馬鹿しくて話しにもならぬ。」

彼女の右側の男性が声を荒げた。

「姫様。こんな老いばれの戯言に耳を貸す必要はございません。今すぐ、彼奴を締め上げ、事の真偽を確かめましょう。」

それに対して、老婆は姫と呼ばれる彼女に何事かを耳打ちする。

彼女の吊り上った大きな瞳が一瞬さらに大きく開いた。

「オババ、それは真か！」声を上げた姫に老婆は小さく頷く。

「……フジキリオウの拘束を解き、私の預りとする。暫くは…、そうだな。私の身の回りの世話をしてもらおう。」

彼女は暫く考えた後、そう告げた。

その言葉に男は忌々しげな表情を浮かべたが、特に異論を述べようとはしなかった。

利央は全く状況がつかめなかったが、何やら身の危険を脱したらしいということは理解できた。

「さて、どうしようか。」

男は席を外し、姫と呼ばれる少女と老婆、そして、利央がその場に残っていた。

「お前、何ができる？」少女は利央にそう尋ねた。

「何ができると聞かれても……。」

利央は気がついてからずっと混乱している思考を整理しながら答える。

「出会った時も言いましたが、私はここがどこなのかも分かりません。一般的なことはできると思いますが、この状況を見ますに、私の知っている【一般的】なことがここでも果たして【一般的】なのか判断できません。」

とりあえず丁寧な話し方をした方が良さだろうと考えながら、利央は言った。

「ふむ。生まれたての赤子というが、言葉は通じるし、考えることもできるか。」

では、世の中のことを知らない者に接するように説明してやるか。

┐

そして彼女は話し始めた。

「今、お前はノキテイル帝国という国にいる。帝都の名前はフリックス。そしてここはその国の西方にあるフリミエールと呼ばれる村の近くだ。帝都からは馬で四日ほどかかる位置にある。」

王の名前はトイテ・フリックスという。ちなみに私はその娘でユニテルといい、上に三人の兄がいる。娘は私一人だ。

さてここまでで何か心当たりはあるか。」

彼女は話しを上手く飲み込めていない表情を浮かべる利央を見てさらに説明を続けた。

「では、今お前が置かれている状況について話をしよう。

私は、フリミエールを度々襲う賊を討つためにここに来ている。

先ほどお前を捕捉したのは、お前を賊の仲間ではないかと考えたからだ。今もそうだが、この国にそんな怪しげな格好をした人間はいない。」

賊の仲間と間違えても仕方なかるう？と利央に目を向ける。

利央は学校帰りの服装、つまり制服を着ていた。

「結果、私はお前が賊の仲間ではないと判断し、こうして逐一丁寧に説明してやっている。

正直、何を説明すれば良いのか分からぬがな。

お前から何か聞きたいことはあるか？」

利央はユニテルの説明について、考えを巡らせた。

全く知らない国と土地の名前。しかも彼女自身は王女だという。

王女！今は一体何時代だと思った。

賊を討ちに來たというが、彼女が着込んだ甲冑姿をみると、中世あたりの様に思える。

（まあ、ここがどこで、いつの時代でとかはどうでも良いか。要はこれから自分はどうなるのか、いやどうするのが肝心か。）

平凡を目指した彼はそう考えた。

自分が置かれている状況全てに疑問を抱いていたが、彼は普段と変わらない考え方をした。

平凡な人生を送るために彼が実践してきたことの一つ、

<あらゆることに抗わない>

何かに抵抗することは、特別の行動を起こすこと、つまり普通から外れることだと彼は考えていた。

まずは流れに身をまかせよう。そして、ここの、この世界の平凡、当たり前を目指そう。彼はそう決心した。

「私から聞きたいことはございません。」

先ほどの話では私は貴女の預かりになり、身の周りの世話をするとのこと。

何も分からない自分ではありますが、精いっぱい務めたいと思います。」

こうして利央はユニテルの預かりとなった。

「オババ、奴をどう見る？」

兵士に利央を他の天幕へ連れて行かせた後、ユニテルは老婆に尋ねた。

「まあ、害はないじやろう。あの様な華奢な体格では剣も満足に振るえますまい。」

見た目もまるで女子のようじゃった。兵に与えれば大喜びするじやろうて。あれだけの美人はその辺の娼館にはありますまい。」

「そういうことを聞いておるのではない。」

下品な笑い声を上げる老婆を軽く窘める。

「私が聞いているのは、彼が本当に＜竜憑き＞かどうかだ。」

＜フジキリオウは竜憑きじゃ。＞

先ほど老婆はユニテルにそう耳打ちした。

だから彼女はあれほど驚き、自分の預かりとしたのだった。

「信じられぬのは無理からぬことじゃが、儂の占いではそうである。奴は竜憑きじゃと。」

奴を姫の預かりとしたのは正しい判断じゃと思いますぞ。

竜憑きを下手に扱うと何が起るか分かりませぬゆえ。

また、あの場で奴が竜憑きであることを明かさなかったのも良い判断じゃった。

あの場にはカミステルがおった。

姫様が竜憑きを手に入れたことを知れば、あやつらが何を仕出すか分かったものじゃないですからな。」

「カミステルか。」

カミステルはユニテルが賊を討伐するにあたり、三人の兄から同行を命じられた人物だった。

ユニテルは彼を彼女の行動を逐一、兄たちに報告するために送りこまれた間諜だと考えていた。

兄たちに見れば、ここでユニテルがほんの僅かでも失敗を犯すことを期待しているのであろう。

彼女の出陣に際し、恩着せがましくカミステルを同行させた兄たちの行動はユニテルにとって片腹の痛い話だった。

「姫はこの討伐で大きな困難に遭いなさる。

じゃが、フジキリオウを拾ったことで、その困難をぐりぬけることができるじゃろうて。」

「大いなる光に出会う、か。ババの話では私の人生を大きく変える出会いになるとのことだったな。」

この度の討伐について老婆に占ってもらった内容だった。

ユニテルは大きな困難に出会うが、同時に大いなる光に出会う。

その光は彼女の人生を大きく変えるものだという。

「大いなる光だと思われるフジキリオウ、竜憑きとは出会った。

さて、大きな困難とは何であろうな。」ユニテルは老婆に問いかけた。

「さてそれは。ババの占いは万能ではありませんゆえ。」

老婆はそう答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9061y/>

彼女のために僕ができること

2011年12月2日21時51分発行